

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：33923

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870276

研究課題名(和文) 道德哲学のドイツ的諸形態に関する研究 理論と実践の観点から

研究課題名(英文) Research on the practical forms of moral philosophy in the 18th century Germany

研究代表者

大塚 雄太 (OTSUKA, Yuta)

名古屋経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：70547439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、哲学史的文脈の背景に退いていた諸思想から豊かな社会認識と道德哲学の実践形態とを発掘することによって、ドイツ近代の社会思想史的文脈の存在を提示するものである。本研究は、主に次の4点の分析からなる。1) ガルヴェの社会思想および翻訳作品の分析、2) メーザーの社会思想とカント批判の構造の解明、3) カントの道德哲学に理論的に立脚したフィヒテのフランス革命論、4) フランス革命とナポレオン体制に対するドイツ圏の思想的反応。以上に関する分析成果によって、カントからドイツ観念論にいたる哲学史的理解を相対化する社会思想史的文脈が示された。

研究成果の概要(英文)：This research shows the existence of the context of the modern German history of social thought by unearthing a rich recognition about society and the practical form of moral philosophy from thoughts that had retired to the background of the history of philosophy. This research mainly consists of the analysis of four points, as follows: 1) the social thought of Christian Garve and his translation of the Scottish enlightenment, 2) Justus Moeser's social thought and the logic of his critique of Kant, 3) Fichte's view of the French Revolution, theoretically based on Kant's moral philosophy, and 4) ideological reactions in Germany to the French Revolution and Napoleon. Through the above analysis, a new context of the history of social thought that relativizes the framework of the history of philosophy from Kant to German idealism is demonstrated.

研究分野：近代ドイツ社会思想史

キーワード：ドイツ啓蒙 道德哲学 市民社会 フランス革命 スコットランド啓蒙 通俗哲学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、哲学的文脈において必ずしも十分に光が当てられてこなかった諸思想から豊かな社会認識と道徳哲学の実践形態とを掘り起こすことによって、ドイツ近代の社会思想史的文脈の存在を提示しようとするものである。近代ドイツ社会思想史の記述は、啓蒙期の研究が十分な進展をみしていないこともあり、なおカントからドイツ観念論への展開をたどるのが通例である。その一方で当該期を対象に蓄積された人文学諸領域における研究成果は、社会思想史研究に十分に反映されているとはいえない。啓蒙期の複合的かつ国際的な言説空間を記述するにあたって、その学際性を損なわない、新しい思想史の枠組みが必要であると考えられる。

2. 研究の目的

研究代表者はこれまでC. ガルヴェ (1742-98) の思想研究を通じて、彼がドイツ思想史の展開において重要な役割を果たしたことを強調してきた。イギリスを中心とする外国諸思想の伝播過程において、彼がドイツにおける最重要窓口となっていた事実は疑いえない。ガルヴェによる多くの翻訳作品は、一方で道徳形而上学の成立を促し、他方で文学・美学領域において独創的作品が生まれる礎を築いた。ただし翻訳は単なるコピーではなく、多分に翻訳者の解釈を含んだ思想的作品である。その解釈の詳細な説明はしたがって、思想の浸透過程と波及効果を緻密に再構成するに際して必須の手続きであるが、ガルヴェの諸作品に関し、現状では、ほぼ手つかずの状態にある。

翻訳作品の詳細な検討のみならず、ガルヴェ自身の著作に関する研究もまた、国際的にみても進んでいない。通俗哲学者ガルヴェが提示した市民社会や現実の人間、あるいは学知そのものに対する知見は、カント的啓蒙によって清算されうるものではなく、むしろ啓蒙の実践性、およびその方法的特質としての学際的アプローチを体現するものであった。したがって、彼独自の著作を分析することは、ドイツ啓蒙の複層性を照らし出すのみならず、いまだ説明されていない社会思想史的文脈を、その豊かな社会認識とともに浮上させることにつながると考えられる。

本研究は、これまでのガルヴェ研究によって獲得された展望に基づき、同時代の思想史的展開にガルヴェを位置づけようとするものであるが、それゆえに、分析の対象となる思想家はガルヴェに限られない。また、社会思想史的文脈を模索するにあたって、現実社会の動向と思想との緊張関係をつねに念頭に置き、思想の実践的態度を浮上させることを主眼とするため、研究の基本視角として、理論と実践という主題を設定する。

3. 研究の方法

理論と実践という主題は、哲学的潮流と社

会思想的潮流との合流点であり、論争の震源地でもあった。哲学的文脈と社会思想史的文脈の接合を十分に可能にするこの分析視角は、両者の影響関係に根差すドイツ思想史の複層性の解明にとって有効であると考えられる。

理論と実践という主題によって想起されるのは、カントが1793年に『ベルリン月報』に公表した「理論と実践」という長編論文である。理論と実践という主題にアプローチするには、当該論文の分析と先行研究の整理が出発点となりうるが、本研究はそれを後に回し、先にガルヴェとJ. メーザー (1720-94) の思想分析に着手する。彼らの社会思想に関する研究蓄積は、カントのそれに比して圧倒的に薄く、分析に大きな時間が割かれることが想定されるためである。

具体的手順として、まずいくつかのガルヴェの社会思想と翻訳作品を検討し、次いで、メーザーの理論と実践に関する論考を検討する。それらが一定の段階に達したのち、カントの理論と実践の論理を再確認し、理論の継承関係をフィヒテへと展開する。これらを総合する際、フランス革命への反応を視野におくことによって、思想と社会との緊張関係をクローズアップする。上記に付随する論争の拡大とその実態解明については、雑誌や書評、さらには書簡などにも目配りする。なお、本研究開始時点において、ドイツに長期滞在中であり、ハレ大学J. シュトルツェンベルク教授をはじめとするハレ大学哲学科関係者のみならず、本研究にとってきわめて重要な先行研究を有する、パリ第8大学N. ヴァセック教授、ライプツィヒ大学C. アルトマイヤー教授、ギーゼン大学D. バッハマン＝メディック博士などとのコネクションが確立されている。

4. 研究成果

(1)

歴史主義や保守主義といったメーザーの思想史的位置づけについて再検討し、彼の思想が有する啓蒙的意義に焦点をあてつつ、晩年の草稿「理論と実践」を分析した。この論考はカントの論文に触発されたものである。あわせてカントの「理論と実践」論文の論理を整理することによって、メーザーとの対立点が明確化した。メーザーは、カント流の理論が現実と乖離する傾向をもつこと、さらにはそれを是とする世論の動向に対して警告を発した。批判は、支配者身分の世襲と体儀制をめぐるものであり、メーザーによれば、これらの性急な否定は歴史的現実の意味と実効性を見失わせる。カント的啓蒙に対する警戒は、もちろんメーザー固有のものではなく、たとえばF. ニコライがメーザーに同調している。ニコライはガルヴェとも関係が深く、彼らとメーザーとのつながりが浮上したことにより、本研究が模索する社会思想史的文脈のひとつの経路が明らかとなった。得ら

れた考察結果については、学会報告を行うとともに、学術論文として公表した。その際、歴史学研究者から多くの有益な指摘が得られただけでなく、歴史学研究との連携関係を構築できたことは大きな成果である。

(2)

2011-2013 年度に受領した科研費課題でも進めていた、A. ファーガスン『道徳哲学綱要』とそのガルヴェ訳、およびガルヴェによる「注釈」の分析を完了し、学術論文として公表した。ファーガスン『綱要』の翻訳に存するガルヴェ独自の解釈およびそれに付された「注釈」の内実が明らかとなったことで、シラーやヘーゲルに対していかなる点で影響力を有したのかを見定めることができた。また本研究では、ガルヴェの思想史上の位置と彼の国際的な立ち位置を明確化する意図から、ガルヴェとスミスとの関係を注意深く探ることによって、ガルヴェがスミスの「同感」概念に接近していたことを見出し得た。ガルヴェの影響圏にスミスを接続できたことで、ドイツ圏へのスミスの影響について、いくつかの新たな知見を得ることもできた。

(3)

ガルヴェの通俗哲学の方法的特質を描き出すにあたって、彼がなぜ通俗性を重視し選択したのかを確定しておかなくてはならないが、いくつかの小論を検討することによって、明確にカントの方法を念頭に置き、主体的に通俗哲学者であろうとしたことが明らかとなった。彼が構想した道徳哲学は、学知や理論の世界にとどまるものではなく、社会さらに言えば民衆の中においてこそ有用性を発揮するものでなければならなかった。こうした考え方は、フランス革命に対する評価ととりわけ公論のあり方について論じられる際の下地ともなっている。

(4)

カントの道徳哲学に立脚したフィヒテのフランス革命論、ゲンツによるバークの翻訳とフランス革命批判、さらにはすでに着手済みであったフリードリヒ 2 世の道徳哲学と啓蒙観の分析などを上記成果と総合することによって、18 世紀後半から 19 世紀初頭のドイツ思想史の社会思想史的な文脈の存在とその具体的な展望とを得ることができた。とりわけ重要なのは、フランス革命およびナポレオン体制のドイツへの甚大な影響であり、その思想空間の動態を捉えるにあたっては公共圏に着目し、これをめぐるいくつかの言説を、当初想定していた分析範囲を超えて考察した。啓蒙期のメディア研究によっても明らかにされてきた公共圏の活性化は、公論への思想家の一定の信頼とも整合的であったが、革命の騒乱はこの信頼を安定的なものとはしなかった。得られた知見については西洋史学会の小シンポジウムで発表し、近く論集の一編として収録される。

18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、以上で開拓した視野をベースに、さらに多くの

言説を分析することによって、ドイツ近代の社会思想史的な文脈は、よりいっそう具体化されるものと思われる。本研究課題で得られた成果を今後の研究展開に十分に生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

大塚雄太「高柳良治『ヘーゲルの社会経済思想』」、『経済学史研究』、58-2、2017 年、査読なし。

大塚雄太「Eugen Wendler, Friedrich List(1789-1846): Ein Oekonom mit Weitblick und sozialer Verantwortung, Springer Gabler, 2013」、『経済学史研究』57-2、126-127 ページ、2016 年、査読なし。

大塚雄太「ファーガスンからスミスへ「注釈」にみる初期ガルヴェの道徳哲学」、『経済学史研究』、57-1、51-72 ページ、2015 年、査読あり。

大塚雄太「ユストゥス・メーザーにおける理論と実践 あるいは、歴史と伝統」、『経済科学(名古屋大学)』、62-4、61-75 ページ、2015 年、査読なし。

〔学会発表〕(計 4 件)

大塚雄太「近代プロイセンにおける公共圏の思想 啓蒙・革命・祖国愛」、『日本西洋史学会第 68 回大会(小シンポジウム)』、2018 年。

大塚雄太「J. メーザーのカント批判とその論理」、『中部ドイツ史研究会』、2017 年。

大塚雄太「『ヘーゲルの社会経済思想を読む』」、『社会思想史学会第 41 回全国大会』、2016 年。

大塚雄太「ユストゥス・メーザーにおける理論と実践」、『経済学史研究会第 232 回』、2015 年。

〔図書〕(計 2 件)

社会思想史学会編『社会思想史事典』、大塚雄太「ドイツの啓蒙」「官房学」、丸善出版、近刊予定。

岡本明・安藤隆穂編『ナポレオン帝国と公共性』、大塚雄太「近代ドイツにおける公共圏の思想 啓蒙・革命・祖国愛」、ミネルヴァ書房、近刊予定。

〔その他〕

ホームページ等

大塚雄太「秩序を支える『公平な観察者』モラルはどこにあるのか」、『中部経済新聞・オープンカレッジ』、2017 年 1 月 18 日付。

「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経

済思想：マルクスの思想を考える」、社会思想史学会第 42 回大会セッション報告書

<http://shst.jp/Convention/2017/H.pdf>

大塚雄太「経済の原像にある生存権『生きること』への想像力を」中部経済新聞・オープンカレッジ、2016年2月3日付。

「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経済思想：高柳良治著『ヘーゲルの社会経済思想』を読む」、社会思想史学会第 41 回大会セッション報告書

<http://shst.jp/Convention/2016/I.pdf>

大塚雄太「アダム・スミスの虚像と実像 経済学の原点を見つめ直す」中部経済新聞・オープンカレッジ、2015年6月4日付。

「セッション 18・9 世紀ドイツの社会経済思想：カントの厳格性とその適用可能性」、社会思想史学会第 40 回大会セッション報告書

<http://shst.jp/Convention/2015/B.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚 雄太 (OTSUKA, Yuta)

名古屋経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：70547439